

月刊

子どもの発達・教育 ジャーナル

VOL.8
最終号

「勉強が苦手」というのは、本人もつらい思いをしています。
「勉強をやらせる」よりもまず、「子どもの状況を理解してやる」
ことが、その悩みの解決策になるはずです。

8ヶ月間、毎月読み物としてお届けいたしました。
バックナンバーはブログに掲載しています。
ぜひ、もれなくチェックください！
http://blog.goo.ne.jp/supports_kyotanabe
ブログアドレス変わりました！



- VOL.1 「やる気」とは何か？
- VOL.2 考え方にも個性がある!?
- VOL.3 「見えてない」から出来ない!?
- VOL.4 知識不足が「できない」の原因ではない!?
- VOL.5 脳科学で子どもの行動を理解する
- VOL.6 “困った子”の原因は原始反射のせい!?
- VOL.7 反射を制御して自分自身をコントロールする。

総括テーマ

普通？異常？ひとりひとりの個性とは

発行：個別指導・学習塾 サポーツ京田辺
新田辺駅東側サンフレッシュ2階 0774-65-1316

<コラム>

一見良さそうで、NGな学習

成果が出ないどころか、むしろ逆効果な勉強をしていませんか？

<基礎から問題演習をやり直す>

“そこそこ普通にできる子”。つまり「苦手な単元がある」「通知簿で2がついてしまった」くらいであれば、そこだけをやり直せばいいですが、「授業についていけない」「オール2レベル」である、“勉強が苦手な子”にとっては、基礎と言われる問題や、下学年の問題をやって、解法パターンを思い出して解けるようになったとしても、それ以前に“そもそもの理解”ができていないはずなので、決して問題解決はしないでしょ。

<速く解く。沢山解く。>

プリント学習式のような学習で、どんどん次の問題をやる習慣とは、実は、「思考せずに反射的に解く」つまり、実践的な問題には通用しない、解法パターン暗記をしているだけに過ぎないでしょう。

そういう思考習慣がつくと、「解ける問題は喜んでやるが、×が付くとキレる」といった、まさに、無意味な学習行動しかできなくなります。

「できることだけ取り組む」というのは、やる気ではありません。「できないことに挑戦する」ということは、「ゆっくり・じっくり1問に向き合えること」が求められますから、全く正反対ですよ。

無学年式のプリント学習が有効なのは、あくまで美学年よりも先取りをするいわゆる“英才教育”の場面です。下学年の問題を闇雲に解かせている状態では、教材の有効性は活かされないとわづるを得ません。

そもそも、正しい“勉強の仕方”とは、ひとつではありません。

「現状」と目標によりまずし、さらに「ひとりひとりの個性」によっても適切な方法が変わってきます。ましてや、親や先生にとってよかった方法が必ずしも、その生徒に合うとは限りません。では、どうしたらいいの？・・・

「成果が出るように勉強する」ということです。

つまり「成果が出るか」を途中段階で検証できれば、「間違いない。」ということ。その検証とは、決してチェックテストの点だけをさしているわけではありません。だって、あくまで「途中段階」なのですから。その“指導の意図”が機能しているかということ。ただし、この判断をするためには、「何をもって善しとするか」をプランニングしておくことが必要になるのですが、それが指導者の腕の見せ所ですね。

「普通の人」など誰も居ない。ひとりひとりの個性の存在を理解したい。

ついに当ジャーナル発行も、予定の最終回を向かえました。

これまで、「やる気」といったメンタルな視点から認知理論、そして、幼児期からの発達に関わる問題までを話題にしてきましたが、いかがでしたでしょうか？

「子供の発達・教育」と銘打ったシリーズでしたが、近年社会問題として扱われるようになっていく"発達障害"に関わるテーマでありましたが、ここでは、「障害児・健常児」という区別をしませんでした。

なぜなら「発達障害とは、脳の機能不全である。」と言われているものの、現在の診断基準では、決して"脳の状態"といった原因ではなく、例えばADHDであれば、「どれくらい落ち着きがないか」というような曖昧で、かつ、「社会的に支障をきたしているかどうか」という、いわば"結果論"で判断されるのが実態だからです。

例えば、筆者も近視でメガネをかけていますが、もし、メガネという補助器具がなければ、0.02の視覚障害者です。また、「経営者として成功するのはジツとしていられないADHDだ」などとよく言われます。

このような考え方ならば、インクルーシブ教育として言われる「障害は個性」というよりもむしろ、"個性"全てが"障害"なのではないでしょうか。

「普通はこれくらいできる」というモノサシ自体が、あまりに心無い発想で、そういう考え方こそが、「こだわりが強い」アスペルガーな発想ではないでしょうか。

そもそも「教育」とは、「できないことをできるようにすること」ではないでしょうか。確かに偏りの強い"個性"を持っていると、多くの人簡単にできることをできるようになるための労力が莫大かもしれません。そこまでのリスクを負わなくても、何かで補えることであれば補ったり、関わることを回避すればよいかもしれません。

でも、自身の能力向上を求めて、「できるようにになりたい」と願うのであれば、「闇雲にやる」のではなく、"今の弱み"を明確に把握し理解せねばならないはずです。

このジャーナルが、その理解のための一助となっていれば幸いです・・・

しかし、残念ながら、現在一般的な教育環境は「知識の詰め込み」に終始しているのではないのでしょうか？

社会として「教育」が「発達」も含めた理解をされるようになり、本当に子ども達ひとりひとりの個性に応じた成長が促されるようになって欲しいと願いながら、私どもも教育者として、微力ながら出来る限りの活動をしていきたいと思えます。

講読いただき、ありがとうございました。

<参考資料>

文部科学省によるADHDの定義

ADHDとは、年齢あるいは発達に不釣り合いな注意力、及び/又は衝動性、多動性を特徴とする**行動の障害で、社会的な活動や学業の機能に支障をきたすもの**である。

また、7歳以前に現れ、その状態が継続し、中枢神経系に何らかの要因による機能不全があると推定される。



つまり。。「支障をきたしている」と思っていなければ、障害ではない!?

ディスレクシア（読み書き障害）について

知的能力には問題があるのに、文字の読み書きができない特異的障害のことです。最近TVなどで取り上げられることも増えて少しずつ認知されています。

「怠けている」などと、これまで単純に"勉強嫌い"と思われる子供の中には、文字だけが"把握"できずに"混乱"してしてしまうという"特性"がある子が居るのです。TVで取り上げられる事例の方などは特に重篤ですが、もちろん、人の能力としては、逆に文字感覚が優れているという場合まで、さまざまな"個性"があるはず。つまり、「漢字が苦手」というのも、非常にゆるいディスレクシアと考えることもできるのではないのでしょうか。

もちろん、「生まれ持った能力だから」などと諦めてしまうのは、「教育」の存在を無視した態度でしょう。そんな"特性"があるから、「感覚に優れた人よりも苦痛感が多い」ということは理解してあげた上で、「その分努力する」という"気持ちを支えてあげる"ことこそが、子供に対する"教育"指導なのではないかと思えます。



他の塾でうまくいかなかった方や不登校などでお悩みの方など、一度、お気軽にご相談ください。

あなたの学習をサポートします。
Supports

「勉強を教える」のではなく、「勉強の仕方」を教えます。

個別指導 学習塾 サポーツ京田辺 0774-65-1316
新田辺東側サンフレッシュ2階
サポーツ京田辺 検索